

【書評】

山下英一氏の 労作『グリフィスと福井』

舟澤 茂 樹

福井藩から同大学に派遣された日下部太郎にラテン語を教授していた(明治元年)。ところが、日下部は明治三年四月留学半ばにして異郷の地で客死した。グリフィスはかねてから俊秀日下部に瞠目しており、自ら「御雇」として日本に赴く機会があれば是非福井藩へと志していたようである。

早くから洋学に注目していた福井藩主松平春嶽は安政四年(一八五七)に藩校明新館に洋書習学所を開設した。慶応元年(一八六五)には瓜生寅(三寅)を英学方に登用し、積極的な導人が計られている。

グリフィスは英学の教師として福井藩に招聘され、「化学と物理」を担当した。福井に赴任してきたのは明治四年(一八七一)三月四日で、二十八歳であった。その折、福井藩士の中で、「雇外人取扱方」に任用されたのは佐々木長淳(権六)であった。当時四十歳。彼は大砲・小銃を設計したり、西洋式帆船一番丸を造船するなど科学技術に卓越しており、慶応三年(一八六七)には藩命で渡米し、グリフィスの相棒としては最適の人物であった。また、佐々木長淳の長男忠次郎はグリフィ

スが最も目をかけていた藩校明新館の生徒であった(当時十二歳、後に東京大学理学部教授)。佐々木親子とグリフィスの出会いにとりわけ注目したい。

グリフィスが着任後直ちに着手したのは明新館内に設ける化学所の設計であり、同時に化学の教科書の編集も行っている。また、グリフィスは日常生活の中で「散歩」を日課として重視しており、福井城下とその周辺地域を朝・昼・晩随時散策し、簡潔ながら的確に観察したものを日記に記録している。その中には神社の祭礼や芝居見物、銭湯など得難い行事や風俗の記録も多い。

日記を読み進める折、絶えず参照したのが巻末の年譜と人名索引であり、グリフィス研究の第一人者である著者の労苦の結晶ともいえる。年譜は、「グリフィス」・「アメリカ」・「日本」・「福井の英学」の四つに分けて年次別に関係記事を収めている。「福井の英学」欄は福井英学史年表としても活用することができよう。また、「人名索引」は、グリフィスと関わりのある約四百人が対象となっており、所定の頁を検索することで関係記事が読める

机上に昭和五十四年(一九七九)に福井県郷土誌懇談会(福井県立図書館)が出版した新書版の『グリフィスと福井』と昨年三月国立大学法人福井大学監修の増補改訂版として刊行された同名の書の二冊がある。後者は初版本より実に三十数年後に出版されている。この間、両書の著者山下英一氏はグリフィス著『明治日本体験記』(一九八四年平凡社刊)や『グリフィス福井書簡』(二〇〇九年刊)等グリフィス関連の四冊を出版されていることからみて改訂新版の『グリフィスと福井』は言わば同氏のグリフィス研究の集大成ともいえようか。

グリフィスはラトガース大学理学科に在学中、同大学に留学中の横井小楠の二人の息子左平太と太平に英語を指導したり(慶応三年)、

というものであり、編集者の労を多としたい。

本書は、「1. グリフィスの生涯」、「2. お雇い科学教師グリフィス」、「3. 福井の英学」、「4. グリフィス日記（英文・和訳）」で構成されているが、これまでグリフィスに傾倒してきた研究の厚みと、執筆の労苦がうかがえて深い感銘を受けた。